

LINN LP-12 の再構成(38) (HP 収載)

1. はじめに

前報(37)までに LINN LP-12 のフォノケーブルのバランス化などの効果の確認ができましたので引き続きアナログ盤を聴いてみます。

2. LINN LP-12 の再構成の実施内容と試聴方法

LINN LP-12 の再構成の実施内容は、前報(35)のとおりです。

前報(35)の対策の確認を下記音源で行います。

今回は、マスターが同じで、カットニングやプレス異なる盤の聴き比べを行ってみます。試聴に際しては、第4時定数まで注意深く聴きこんでいきます。

A. モーツァルト ディヴェルティメント第17番

ウイリー・ボスコフスキー指揮ウィーンモーツァルト合奏団

A-1 LONDON SLA 1067

A-2 LONDON 360R5 6009

B. バッハ トッカータとフーガ

ヘルムート・ヴァルヒャ (オルガン)

B-1 ARCHIV MA5007

B-2 ARCHIV SLAM 1(日本グラモフォン)

C. バッハ カンタータ第80番 BWV80

カンタータ第140番 BWV140

エルハルト・マウルスベルガー指揮ゲヴァントハウスオーケストラ

C-1 ARCHIV 198 407(Hambrug)

C-2 ARCHIV 198 407(Hanover)

D. ワーグナー ワルキューレ

シヨルティ指揮ウィーンフィル

D-1 LONDON LOOC-1504/8

D-2 LONDON KIJC 9180/84

3. LINN LP-12 の再構成後の試聴結果

A-1 と A-2 の比較ですが、A-1 がオリジナルの国内盤で、A-2 は、通常のカットニングシステムと異なり、テープからカットニングアンプまでを直接結ぶダイレクトコネクティングという方式によりハーフスピードで日本ビクターがカットニングしなおしたものです。

A-1 はこれまでの印象から随分変わっており、響きが豊かで弦の艶やかさも向上しています。これまで LONDON 盤ということで DECCA カーブの位相反転で聴いていましたが、ZANDEN のリストでは TELDEC カーブの位相反転になっていますので TELDEC カーブにしますと、エッジが取れてきます。さらに ZANDEN のリストでは第 4 時定数は Mid になっていますので、Mid にしますとよりソフトな印象になります。

A-2 もこれまでの印象から随分変わっており、響きが豊かで弦の艶やかさも向上しています。A-2 は ZANDEN のリストにはないので、A-1 と同じ条件で聴き始めましたが、よりダイレクト感を味わいたいので、DECCA カーブの位相反転、第 4 時定数 High にしますと、類をみないインパクトを感じました。

B-1 と B2 の比較ですが、B-1 がポリドールの国内盤で、B-2 の方は日本グラモフォン発売の盤です。

B-1 はこれまでの印象から随分変わっており、響きが豊かです。ZANDEN のリストではポリドールの国内盤は DECCA カーブと TELDEC カーブの 2 種類があるますので切り替えて聴き比べてみましたが、DECCA カーブ、位相反転、第 4 時定数 Mid がペダル領域の低音の量感と明晰さがあります。

B-2 の日本グラモフォン盤は ZANDEN のリストにはないので、DECCA カーブと TELDEC カーブを切り替えて聴き比べてみましたが、DECCA カーブの方のバランスがよく、勢いがあり、DECCA カーブ、位相反転、第 4 時定数 Mid とします。

C-1 と C-2 の比較ですが、盤の No. は同じで、C-1 の方が古く、クレジットに Hambrug の記載があり、C-2 は新しく、Hanover の記載があります。ZANDEN のリストによれば、初期盤と後期盤とも、TELDEC カーブ、位相反転、第 4 時定数 Mid となっています。

C-1 は、これまでに比べて 1966 年の録音としては、ヴィオリーノピッコロなどの古楽器の質感や通奏低音など、随分と鮮度の高い音になっています。これまで TELDEC カーブ、位相反転、第 4 時定数 High で聴いてきましたが、第 4 時定数 Mid で聴いてみると、カンタータの女王と称されたアグネス・ギーベルなどのソリストの歌唱の伸びやバツハゆかりの聖トーマス教会の残響までリアルになっています。

C-2 は、これもこれまでに比べて C-1 同様、鮮度の高い音になっています。TELDEC カーブ、位相反転、第 4 時定数 Mid で聴いてみましたが、響きがまとわりつくようなところがありますので、第 4 時定数 High にしました。

D-1 と D-2 の比較ですが、D-1 の方がオリジナルの国内盤のようで、D-2 の方は、A-2 と同じくダイレクトコネクティングという方式でのハーフスピードのカッティングで、米国 RTI プレスとなっています。

D-1 は、これまでの印象と違い、分離がよくなっています。DECCA カーブと TELDEC

カーブの2種類があるますので切り替えて聴き比べてみましたが、DECCAカーブ、位相反転、第4時定数Midで音の切れが良好です。

D-2の米国RTIプレス盤は、ZANDENのリストにありませんが、これまでリファレンスとしてDECCAカーブの位相反転で聴いてきて違和感はありませんでした。今回、第4時定数をMidにしてみましたところ、より自然な感じがしています。

4. まとめ

フォノケーブルのバランス化を主要な対策として、ターンテーブルのメカ強化やモーターの電流強化、アースアキュライザーをAVドーナッツに通したこと、ベルト交換などの総合的な効果により、マスターが同じで、カッティングやプレスの異なる盤の音質の違いを聴き分けることができ、今回、特に第4時定数も検討対象にしたところ、以前と異なった結果になったものもありました。

以上